名古屋学院大学論集　社会科学篇　第48巻　第3号（2012年1月）

ウィルタとは何か？

――弦巻宏史先生の講演記録から　彼らの憲法観を考えるために――

榎　澤　幸　広・弦　巻　宏　史

目　次

序文（榎澤幸広）
第一部　弦巻先生の講演をよりよく理解するために（榎澤幸広）
1. はじめに
2. 弦巻先生の紹介
3. 弦巻先生との関係
4. フレップ会について
5. ウィルタ民族とは？
6. 法学者の私がこのような記録を残そうと思った理由
7. まとめ
第二部　弦巻宏史先生によるフレップ会新入会員に対するガイド講演記録「資料館ジャッカ・ドフニのご案内」
（弦巻宏史，校正及び写真撮影・榎澤幸広）
1. はじめに
2. ジャッカ・ドフニとは？
3. ウィルタ民族とは？
4. ウィルタの生活様式
5. 階級のない社会
6. ボオについて
7. 国境や戦争のない社会
8. 無知蒙昧な民族？
9. イルガについて
10. ダルドゥーについて
11. ウィルタの衣服
12. ウィルタの薬
13. セワについて
14. サマの道具，ウィルタの音楽
15. アイ子さんと歌
16. 樺太アイヌの文化について
17. ウィルタとトナカイ
18. 死後の世界？
19. 自然との一体感
20. 北川アイ子と日本・日本人
21. 再びウィルタや樺太アイヌの文化
22. ウィルタが網走にいる理由
配布資料「2010. 10. 12　資料館ジャッカ・ドフニのご案内　弦巻宏史」
参照・引用文献一覧

序文

本稿は二部構成となっている。第一部は「弦巻先生の講演をよりよく理解するために」，第二部は「弦巻宏史先生によるフレップ会新入会員に対するガイド講演記録」である。第一部は，ウィルタ民族のことや彼らと関わりのあった弦巻先生について知らない読者が第二部をよりよく理解するための手引として，私，榎澤が書いたものである。また，この部はなぜこのような記録を残すことに意味があるのか，日本国憲法や法律との関係もふまえた上で，簡単ではあるが論じてある。第二部は，本稿のメインディッシュにあたる部分であるが，長年，ウィルタ民族と親交のあった弦巻宏史先生による講演記録である。ここでは，ウィルタ民族とは何かを始めとして，ウィルタの文化や歴史，日本との関わり，先生の体験話など弦巻先生による語りの記録が示されている。

第一部　弦巻先生の講演をよりよく理解するために

1. はじめに

本稿は，2010年10月9日（火）午前10時から12時まで約2時間にわたって，北海道・網走市内の資料館ジャッカ・ドフニで行われた弦巻宏史先生の講演記録（題目は『資料館ジャッカ・ドフニのご案内』）である。受講者はフレップ会の新規メンバーである。

2. 弦巻先生の紹介

弦巻先生はウィルタ協会の中心人物として長年活動しており，サハリン島から網走に移住してきたウィルタ民族の北川アイ子氏と長年親交のあった人物である。この親交の深さは，講演記録にて，アイ子氏を“アイちゃん”と呼んだり，彼女と一緒にキノコ狩りに行ったエピソードなどからも読み取ることができる。

1937年生まれで，北海道学芸大学（現在の北海道教育大学）を卒業後，中学校の社会科の教員になった。北見の教員時代（1970年代半ば頃）に，オホーツク民衆史講座に関わり，その時はじめてウィルタ民族のゲンダーヌ氏（北川アイ子氏の兄）に出会うことになる（田中了先生が講師でゲンダーヌ氏はゲストとして証言）。網走に転勤後（1980年頃），ゲンダーヌ氏と親交の深い田中了先生と再会したこと，そして北川アイ子氏のご子息の担任教師になったことにより，ウィルタ民族との関わりが深くなった。それが現在も続いており，ジャッカ・ドフニに訪れる人のガイドを行なったり，市民講座の講師を行なったりしている。

司馬遼太郎氏が『街道をゆく38　オホーツク街道』（朝日新聞社・1997）で示しているように，「広い額をもち，高い鼻梁に度のつよい近眼鏡をかけて，背は低からずという感じで，都会ふうの紳士である」（147頁）と正にその通りの人である。司馬氏のこの作品が週刊朝日に連載されたのが1992年。それに対して私自身が今回お会いしたのが，2010年10月である。20年弱隔てた現在，70代であるにもかかわらず，司馬氏の説明は現在書かれたのかと間違えるほどであった。そして，笑顔を絶やさず，話の端々にジョークを織り交ぜながら難しい話をわかりやすく説明して下さる知的ユーモアに富んだ方である。

3. 弦巻先生との関係

弦巻先生に私が初めてお会いしたのは，2009年9月であった。きっかけは，私が獨協大学法学部の非常勤講師をしていた際，4年生の

ゼミ合宿で北海道に行ったことである。ゼミ生たちは，“北海道の少数民族を知る”というテーマを掲げ，最初の目的地として，平取町にある二風谷を訪れ，アイヌ民族の方々と交流をした。そして，次の目的地として，網走市を選んだ。資料館ジャッカ・ドフニを訪れるためである。当初の目的はジャッカ・ドフニを見学するだけの予定であったが，いくつかの偶然が重なり，弦巻先生に詳細な解説付きで資料館案内をしてもらうことができた。一つ目の偶然は，同じ網走市内にある北方民族博物館を出た後，すぐジャッカ・ドフニを訪れる予定であったが，運転手である私が道に不案内であったため，迷子になってしまった。その結果，タイムスケジュールでは2時位から見学する予定が4時前に到着してしまい予定が大幅に遅れてしまった。たまたまの偶然であるこの時間の遅れがなければ，先生にお会いすることはなかったかもしれない。そして，二つ目の偶然として，その日，大学名は忘れてしまったがスラブ研究をしているという大学院生の方が先生の解説付きで資料館を案内してもらうという約束を4時にしていたのである。先生はその時，2週間ぶりにジャッカ・ドフニを訪れたと言われていた。このタイミングが合致したことにより，先生の解説を聞きながら資料館内を巡るというおこぼれにあずかることができた（更には，天都山にある少数民族ウィルタ・ニブヒ戦没者慰霊碑キリシエ（靜眠の碑）にも連れて行ってもらった）。

この案内をして下さった弦巻先生からより深いお話をお聞きしたいという思いやそれを記録に残したいという気持ち（ゲンダーヌ氏の生涯については田中了先生の著書があるため特に北川アイ子氏の生涯）もあって，その後弦巻先生にその旨をご相談したところ，快く承諾して下さった。そこで，2010年10月8日から網走に向かい，資料館ジャッカ・ドフニで種種様々なお話を聞かせて頂いた（やはり北川アイ子氏と親交の深かったウィルタ協会のメンバーである川村信子氏も一緒に参加して頂きたくさんのお話を聞かせて頂いた）。このやり取りは近々別稿で紹介する予定であるが，このやり取りの際，フレップ会の新規メンバーに対して講演会を行なうという話が出た。弦巻先生の人を惹きつける話し方や内容は前年，私や当時のゼミ生たちが体験済みであったため，こちらも記録したいと申し出たところ，快く受け入れて下さった（諸々の事情で，ジャッカ・ドフニがその後閉館になってしまったため，この記録を残せて本当に良かったと思う）。

4. フレップ会について

‘フレップ’とはアイヌ語で赤い果実などを言う“こけもも”を示すが，ウィルタが好んで食べた食材の一つである。最近までフレップ会は，日本で唯一のウィルタ刺繍サークルであった（現在，札幌市にもできた）。このメンバーは，北川アイ子氏亡き後も彼女が作った，ウィルタの重要な文化の一つであるイルガ（ウィルタの紋様）を参考にし様々な刺繍に発展させている。毎年，網走市のエコーセンター2000で作品展も行なっている。このフレップ会はもともと，北川アイ子氏が講師をしていた公民館講座に集まった人たちが1983年頃に作ったサークルである（この公民館講座に近いことは現在も行なわれ，フレップ会のメンバーが講師として派遣されている）。北川アイ子氏が存命の間はその会の顧問として指導を行なっていた。2009年には，北大の招きでサハリン島から来日したウィルタ民族の方々との文化交流も行なわれた。

この会に入会したばかりの新規会員は，イル

ガの背景をよりよく知るために，このジャッカ・ドフニに来て，弦巻先生の話を聞くことになっている。

5. ウィルタ民族とは？

ウィルタとは，“飼いトナカイ（Ulaa）と共に生活する人”の意で，遊牧を中心に狩猟・漁撈をするサハリンの先住民族で少数民族である。ウィルタの元々の特徴は，①戦争（争い）を知らないこと，②階級（上下関係）を知らないこと，③“私有”の概念を持たないこと，④文字を持たないこと，という四点をあげることができる。要するに，食糧も大地の恵みとして必要以上に獲らないし，貧しい者には食糧を分け与えるなど，仲間同士協力し合うため，ゲンダーヌ氏の言葉を借りれば，“乞食や泥棒もいない”のである（田中了編『戦争と北方少数民族』（草の根出版会・1994），29-30頁）。また蓄積という概念も持たないし，子どもたちも自立しているため，それらをあてにせず，一人一人が大自然の中で自立して生きている。少人数でトナカイと共に移動生活をするため，様々な民族と接点を持つ。従って，文字はもたないが語学能力には長けており，皆数言語を操るし，行く先々でトラブルが起こらないようにする。ウィルタにはサマ（シャーマン）がいるが，これはボオ（天。ウィルタの神）の教えを受け予言・治病などを行う人で階級とは無縁であることも付け加えたい。

現在はロシア共和国サハリン州に多くが住み300人ほどと言われている。大日本帝国の領土であった南樺太時代，ウィルタ（日本人は蔑称としてオロッコを使用）を始めとする北方少数民族の人々は敷香のオタスの杜に強制的に集められそこで生活させられた。南樺太開発のためである。その居住地は，ウィルタ以外に，ニブヒ，サンダー，キーリン，ヤクートら（以下，総称として“北方少数民族”とする）が生活していたことから，土人の杜として日本人の観光名所の一つにもされている。1941年の樺太庁統計書である『原住民戸口調査』によれば，一番多いウィルタ287人55戸，次に多いニブヒ97人27戸を始めとして，合計425人92戸が住んでいたという。樺太庁は，彼らを言語能力に劣る未だ動物的な生活を行なう“無知蒙昧で怠惰な土人”（狂暴な性格と書いてある文献もある）と位置づけ，樺太アイヌより劣ると差を下に設け，彼らの智徳の啓発・生活の改善のため，敷香土人教育所を設置した（1930）。ここで彼らの文化とは異なる皇民化教育が行われるわけである。

太平洋戦争が激化し始めた頃，彼らの身体能力の高さに目をつけた特務機関はソ連軍への諜報活動を行なわせるため，1942年，彼らを召集しスパイとして養成，その後活動させた。それ以外の者は，憲兵隊から徴用されたり，女子挺身隊やトナカイ部隊に動員されることになる。

しかし，1945年8月8日，ソ連の対日参戦後，ソ連軍襲撃により，この南樺太は火の海になり（8月20日），北方少数民族の男性たちは日本軍に協力した戦犯者としてその多くがシベリアに送られた。シベリア抑留である。不明者数名を除き，戦犯者は，ウィルタ31名（内，16人抑留中死亡），ニブヒ16名（内，9人抑留中死亡），サンダー2名であった（総人口の1割以上，戸数のうち半数が戦犯者を出していることになる。また，帰還者の大多数も何らかの障害を負っていたという）。戦後ポロナイスク（敷香）に残された家族は，ほとんど女性と子どもばかりであった。彼らは日本軍に協力したスパイの一味とみなされ，彼らにむけられた

目は冷たく，孤立化・内向化していくことになり，彼らは自らの文化や言語を表立って使用できなくなったという。それに加えて，ソ連時代の粛清や貧困も相まって，日本に移住した家族もいた。

ゲンダーヌ氏は約10年ものシベリア抑留生活を終えて帰省先に選んだのは日本であった。理由は，戦犯者の汚名を着せられてサハリンには戻りたくないこと，そして日本のために戦ったから日本に戻れば温かく皆が迎えてくれると思ったからだという。しかし勝手は違い，そのような出迎えもなく，戸籍がないことが判明し，職に就くこともままならない状況であった。その後就籍許可申立手続を行い，許可の審判が下ることになる。それと同時期に，故郷に雰囲気の似ている網走での生活を始めることになる。1975年，かつての上官の手紙から，軍人には恩給がもらえることを知り，『オロッコの人権と文化を守る会（現ウィルタ協会）』の人たちの協力を受けて手続をするが，結果は認められなかった。政府見解として，1）戸籍法の適用を受けていない者には兵役法が適用されないこと，2）兵役法の下，特務機関長には召集権がないこと，3）兵役法に基づかない召集令状は無効であること，4）無効の召集令状を知らずに受けて従軍し，そのために戦犯者として抑留されたとしても日本政府の関知するところではないこと，5）現行の恩給法の下では適用外であること，の五点が示されたからである。

この頃から，ゲンダーヌ氏の心境に変化が見られることになる。それまで「オロッコは滅びゆく民族です」と述べ，自分の生き方に対しても内向的であった彼が徐々に外向的になっていくのである。以下に引用する，1977年7月30日，歴教協全道研究集会（松前）で十数分に及んで彼がウィルタ語で訴えた『ビイ　ハプシウィ（私は訴える）』にそれははっきり現れている（日本語訳は田中了。田中了/D・ゲンダーヌ『ゲンダーヌ―ある北方少数民族のドラマ』（現代史出版会・1978），84–85頁）。

……さて，あの大きな戦争が終って三十二年がすぎました。

しかし，私には戦争は終っていない。

私たちウィルタやギリヤーク，またほかにもいたあの大勢の土地の人（同胞，民族）たちは，あの大きな戦争の時に連れ出され（狩り出され）て殺され，そして棄てられました。

チクショウ！（ゴシプシエィ）この罪（責任）は一体誰がとるのか。日本の政府ですか，それとも日本の天皇ですか。

戦争が終って三十年たっているのに未だに何をしているのか。

死んで消えていったあの若い同胞は日本の国のために死んでいった。

しかし未だに日本の政府は私たちを日本の国民（日本の国の人）として認めようとしない。

私も日本人になって戦いました。ワシューカやヘイジロー，イガライヌも日本人として戦って死んでいきました。

私たち少数民族は樺太ではクウィ（アイヌ）よりももっと悪い（下の）土人として使われました。戸籍すら与えられませんでした。

ウィルタの言葉では犬よりも悪い，というのがありますが，それと同じように扱われたものです。

戦争の時には日本人として使う。戦争が終ればまた棄てる。チクショウ，私たちは犬コロじゃないんだ。ええい，チクショウ！　い

つになったら戦後は終るのか。

日本の天皇は私が苦しみの中で泣きながら五十年間生きていることを知っていますか。

私はいま何もできないが，心の中では死んでいった仲間（同胞）の霊を思うと，だから私は訴えざるをえないのです。

私はいまウィルタの文化を守るために，日本人・北川源太郎と別れ(訣別し)ました。ウィルタ文化はウィルタが守ります。だから私はゲンダーヌにもどりました。

私がウィルタに戻らなかったら，ウィルタ文化は滅びます。いままで日本人がウィルタをオロッコと呼んでたくさんの本に私たちを書いています。

それでもウィルタの本当のことは知られていない。ウソが多い。ウソが本当になったら，おそろしいことだ。ウソが大きくなったらおそろしい。

ウィルタのウソのお話をいまのうちになおしておかねばならない。それが私の大きな仕事です。

父が健在なうちに，昔から残されたウィルタの大変よい文化を守っていきたい……

これを契機に彼の民族復権の活動が進むことになる。ところで，ウィルタと表立って名乗っていたのは，ダーヒンニェニ・ゲンダーヌ氏と北川アイ子氏の兄妹二人だけである。彼らは，自分のためでなく犠牲になった仲間のために民族復権の活動をしてきた。ゲンダーヌ氏には三つの小さな夢（ヌチーカ　トリチビ）があり，ウィルタ協会の協力を得てそれを一つずつ実現していった。一つ目は，資料館ジャッカ・ドフニ（ウィルタ語で「大切なものを収める家」の意）建設（1978年8月実現，2011年閉館決定)。この資料館はウィルタ協会が協力者を募り私費で建てられた。展示物はウィルタの刺繍，衣装，紋様（イルガ），生活品など，北川アイ子氏が言うように「自分の民族の文化が残る」もの，「私が死んでも残る」ものになっている。二つ目が，サハリン同族との交流。この第一回目は1981年7月に実現している。ここで歓迎パーティが開かれた際，元婚約者との交流を果すことになるが，パーティーの最後にゲンダーヌ氏は「これからは，ウィルタ，ニブヒなどの少数民族が力を合わせて一緒に幸せを築こう。自分たちの幸せは，自分たちの力で手に入れよう」と皆に自立を訴える挨拶をしている。三つ目が，少数民族ウィルタ・ニブヒ戦没者慰霊碑「キリシエ」設立。これは網走国定公園内に1982年5月に実現している。慰霊碑は高さ2.4m，幅1.3m，白みかげ石の台座にオホーツクの海を象徴する濃緑の蛇紋石の碑をのせ，碑の表側には“静眠”，台座には“君たちの死をムダにはしない　平和のねがいをこめて”と刻みこまれている。更に，裏側には「1942年　突然召集令状をうけ　サハリンの旧国境で　そして戦後　戦犯者の汚名をきせられ　シベリアで非業の死をとげたウィルタ　ニブヒの若者たち　その数30名にのぼる　日本政府が　いかに責任をのがれようとも　この碑は　いつまでも歴史の事実を語りつぐことだろう　ウリンガジ　アクパッタァリシュ（静かに眠れ)」と書いてある。

しかし，この三つの夢が実現し，民族復権のたたかいに再度取りかかろうとした矢先，ゲンダーヌ氏は脳出血で倒れそのまま意識が戻らないまま永眠することになる（1984年7月8日)。その後，兄の遺志を継いで，長年ジャッカ・ドフニの館長を務め，更に講演会活動やイルガの指導などを通じて民族復権の運動を行なってい

た北川アイ子氏も2007年12月16日永眠することになる。この結果，ウィルタを表立って名乗る者は，日本国内で誰もいなくなってしまったことになる。

6. 法学者の私がこのような記録を残そうと思った理由

既に，田中了先生とゲンダーヌ氏による共著『ゲンダーヌ―ある北方少数民族のドラマ』（現代史出版会・1978）があるし，その続編である『サハリン北緯50度線―続・ゲンダーヌ』（草の根出版会・1993）（こちらは田中先生の単著）といった優良書がある。しかし，私が改めてこのような記録を残そうと思ったのにはいくつかの理由がある。

一つ目は，あまりにも彼らの存在が知られていない，あるいは知られていたとしても忘れ去られている，無関心である人が多いと思われたからである。実際，聞き取り調査の合間に私はその人の生きてきた証をよりよく知りたいために，その地域をぶらぶら散歩する習慣がある。ジャッカ・ドフニの隣には，散歩道（サイクリングロード）があって，地元の人たちが散歩したり，サイクリングをしたりしている。自転車で知り合いの人とサイクリングをしていた人がジャッカ・ドフニの前を通った時，友人にこの資料館を紹介する言葉として「あっ，ここアイヌの博物館なんだよ」と言っていた。要するに，日本に在住している人どころか，網走市内に住んでいる人ですら，彼らの存在を正確に認識していない人もいるという現実に直に直面した瞬間であった。後日，川村信子氏からも類似の話を聞いている。

二つ目は，一つ目と重なるかもしれないが，私の大学講義での経験である。「憲法」や「法学」の講義で，ウィルタ民族を紹介したとき，学生たちの中に唖然としていた者もいれば，泣いている者もいた。その後，学生たちにその内容についての意見・感想を書いてもらったら，「なんでこんなことを小学校中学校の義務教育で教えないのか」とか「こういうことこそ知らせるべきだろう。これは日本政府悪いだろう。義務教育何だと思っているんだ」などと好意的な意見を書いてくれる人が多かった。しかし，ごく一部であるが差別的な意味合いをもつ“土人”という言葉をあえて記す者もいたり（講義ではこの言葉の問題点は何度も指摘した），日本人を中心に考える立場からその存在自体に懐疑的な意見もあった。

三つ目は，私の法学領域の研究テーマとの関係がある。これは更に二つにわけることができる。

①コモンウェルス圏の憲法研究の経験から

私はイギリスの植民地圏であったコモンウェルスの国々の憲法や関係法を研究している。それらの国々の一つである南アフリカやオーストラリアでは先住民迫害の歴史があり，1990年代から現在にわたって先住民に対する謝罪や補償などが行なわれてきている。注目したいのは，その中の一つの試みとして，各国政府は公的被害を受けたマイノリティの声を記録化するという作業を行なったことである。やり方は異なるが，南アフリカ共和国は真実和解委員会（Truth and Reconciliation Commission）を通じて，オーストラリアは人権及び機会の平等委員会（Human Rights and Equal Opportunity Commission）を通じて公的被害者の声を膨大な文書にまとめた。それらの考え方はこうである。その被害者たちの声が正しいかどうかは後の人間が判断すればいい。とにかく彼らから声を聞き取ることが重要なんだ，ということである。要するに，これらの国々は法や政策を通じ

て，このような“公的被害者の記憶の記録化”を行なった。しかし残念ながら，日本政府はこのようなことを行なっていない。本来であれば，この国の政府が引き起こした戦争の犠牲者たちの声を掻き集め記憶の記録化，謝罪や補償を行なうべきであるが，この犠牲者たちは続々と鬼籍に入ってしまっている（今後詳細な検討が必要になるが，この点憲法前文の「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすること」が重要なキーフレーズになると私は考える。）。色々な場所で聞く言葉であるが，日本政府はまるで過去を封印するために，この犠牲者たちの死，いや絶滅を待っているかのようである。特に，ウィルタを表立って名乗る者は，2007年に北川アイ子氏が亡くなって日本には存在しなくなったわけである。

②もうひとつの声と憲法観の再生

日本国憲法に言う“日本国”の範囲は1952年のサンフランシスコ講和条約2条によって具体的に示されるが，カイロ宣言，ポツダム宣言8条や1946年1月29日のGHQ覚書「日本からの一定の外辺地域の政治的行政的分離」（SCAPIN第677号）などの流れを受けたものである。例えば，GHQ覚書では，日本政府が行政権を行使できる地理的範囲が示されたが，政府が行政権を行使できる日本領域（北海道，本州，四国，九州など），日本領域から除外される地域（政府が行政権を行使できない領域。鬱陵島，竹島，済州島，伊豆，南方，小笠原，硫黄群島，千島列島，歯舞群島など），特に除外される地域（満州，台湾，澎湖列島，朝鮮，樺太など）と示されている。伊豆諸島は，約2ヵ月後に出されたGHQ修正覚書によって，行政分離対象地域から除外されたが，ここで考えたいのは，この期間，日本国憲法の原案が制定されていたことである。何が言いたいかというと，この期間，日本から分離された地域の人々は，（制定過程については異論もあるものの，）何らかの形でその過程に参加できなかったことにある。これは後に日本に再編入されるトカラや奄美の島民もしかり，沖縄の島民も同様である。そして，棄民として切り捨てられたウィルタ民族のゲンダーヌ氏や北川アイ子氏も同様である。私は，戦後の1945年8月15日以降から自由な発想で憲法案をある程度発案することができた当時の国民たちとの違いをここに見たいと考えている。この時期，数多くの憲法草案が政党レベルでも民間レベルでも提案されている。それらは，少なからず，現行日本国憲法に影響を与えているのである。例えば，鈴木安蔵や高野岩三郎が参加した憲法研究会の案はGHQ草案にも影響を与えたといわれる。しかし，行政分離された地域の人々にはそのようなチャンスもなかったのである。従って，彼らの憲法観を“もうひとつの声”として捉え直すことによって，現行の日本国憲法の存在意義や問題点を浮き彫りにすることもできるかもしれないと考えたのである[1)]。正に，ウィルタの生活様式や文化観，ゲンダーヌ氏や北川アイ子氏の訴えを彼らの憲法観とするならば，個人主義的でもない資本主義的でもない憲法観を読み取ることができると思うのである。

7. まとめ

さまざま難しい手引きとなってしまったかも

1）“もうひとつの声”という用語は，従来の発達心理学を含む心理学が男性的な視点を中心になされており女性的な視点が欠けていたとする，キャロル・ギリガン（岩男寿美子訳）『もうひとつの声―男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』（川島書店・1986）から示唆を得ている。

しれないし，講演と重複している部分もある。しかし，とにもかくにも弦巻先生の講演を通じて，何よりもウィルタの存在を知って頂きたいと私は考える。弦巻先生はウィルタを始めとする様々な民族の方々と交流することを通じて“お互いにその存在を認め合うことの大切さ”を講演でも述べられている。日本はもともと“単一民族国家”ではないし，現在も様々な文化的背景を持つ人たちが存在し移住してきている。その人たちとの関係を考える上でも，ウィルタの文化観や宗教観を知る必要があると考えられる。この講演論稿をきっかけとして，異なる他者や集団との交流が盛んになり，認め合いが深まることを願ってやまない。

第二部　弦巻宏史先生によるフレップ会新入会員に対するガイド講演記録「資料館ジャッカ・ドフニのご案内」

日時：2010年10月12日（午前10時―12時）
場所：資料館ジャッカ・ドフニ

1. はじめに

最近，改めてウィルタという民族だとか，それからイルガのことだとか，またアイ子さんの紹介だとか，とりわけアイ子さんの生涯というものがどういうものだったのかということをまとめたい，というお話がきました。ぐうたらな私にとっては非常にありがたい話なんです。これらのお話は時間がどれだけあっても語りつくせないものなんです。今日は限られた時間の中でこれらのことを紹介するわけですが頑張りたいと思います（**講演会の様子，写真1・2**）。

それで皆さんに配布したプリント（後掲・配布資料），これは何もかもたくさん書いてあると思われるかもしれませんが，これは箇条書き，羅列的にただ並べたものです。これを湯浅さんにプリントして頂きましたが，これに付け加えるような形でお話していきたいと思います。

2. ジャッカ・ドフニとは？

まず，資料館ジャッカ・ドフニ（**写真3・4は外観。5・6は中の様子。**）というのは，どういう意味かというと，“ジャッカ”というのは大事なものという意味なんですね。“ドフニ”というのは入れる家というか，彼らにとって特別な倉庫があったわけではありませんですし，だから“ジャッカ・ドフニ”というのは，大事なものを入れる家，宝物を入れる家とそういうふうに思って頂きたいと思います。

写真1

写真2

写真3

写真6

写真4

写真7

写真5

どうしてこれができたかというと，後で詳しくお話しますけれど，網走に2人だけ（ダーヒンニェニ・ゲンダーヌさんと北川アイ子さんの兄妹)，「私たちはオロッコ，オロッコと呼ばれたけれど本当は“ウィルタ”という民族なんです」と言う方がいたんですね（**写真7**)。その2人だけが自分の出自を明らかにするだけではなくて，自分たちの文化を残したいと言って頑張り続けました。この資料館はその結果できたものなんですね。でも，妹さんが2007年12月16日に亡くなったんです。それ以来，正確にはウィルタの手仕事というか刺繍以外色々様々日本には残す人はいないのです。サハリンにはどれくらいいるかというと，およそ300人位ウィルタという民族がいるらしいのですけど，その内昔のお話やウィルタ語やそれから手仕事を伝えられる人は70代から80代の人でせいぜい20人位。世界で最も少ない民族の一つで，すばらしい技術を持っていながらですね。言葉は適切で

ないのですけど，消えていく，消されていく民族かもしれないのですね。今向こうでも非常に頑張っています。その人たちがおいでになった時，「私たちが数年前から始めたことをここでこの二人がやってくれたというのは本当にすばらしいことだ」とおっしゃっていたんですね。北海道大学のお招きで去年，北海道にお見えになりまして，ここに立寄られたときにそんな話をしておりました。

3. ウィルタ民族とは？

それじゃあ本論に入ります。まずウィルタ民族とは何かお話していきたいと思います。ここに書いてありますように，ロシア全体の中のサハリン州ですね。サハリン州というのは，北海道の北にあるサハリン島と千島列島全部とロシアの人は言っております。ウィルタはサハリン州の中のサハリン島の先住民族です。オホーツク海と地図で書いてあるこの部分がアムール川の河口になっております（後掲・配布資料）。そのアムール川から流れた水はご存知のように真冬になる前からだんだん凍っていくわけです。そして，冬になるとここら一帯は全部陸続きになっちゃうわけですね。それで長い歴史の間に，大陸の動物たちもやってきたし，それから人間たちもやってきたわけです。アムール川流域の様々な民族がやってきたわけです。それともうちょっと直線的に言えば，北の方の北極圏に近い方から，それとカムチャッカに近い方からもやってきたかもしれません。7，80年前の日本が領土化していた時代もここにはオロッコだとかギリヤークだとかヤクートだとか呼ばれた民族がいたんですね。本当は正確に言うと，彼らは自分たちのことをなんと言っているかというと，オロッコといわれている人たちは，自分たちのことをウィルタと言っているんですね。ウが大きくてィが小さい，ウィルタというのですね。どうしてオロッコという風になったかというと，一例を挙げると，間宮林蔵が幕末に北方を探検しておりますね。彼ら一行はそれまでこれは島なのか半島なのかわからなかったわけですけど，実際は島だということがわかるわけですね。それで後にここの大陸の間の海峡が間宮海峡と名づけられるわけですね。ところで，間宮が樺太アイヌ（エンチューは自称）に案内されているときに，「あの人たちはオロッコだよ」と言ったというのです。つまり，ウィルタという民族をいろんな民族の人たちがいろんな言い方で呼んでいたわけですね。その一つがオロッコというわけです。また本来であれば，自分たちのことをニブフ（複数形はニブヒ）と言っている民族のことを他民族はギリヤークと言っている。皆さんたちはオロッコやギリヤークという言葉を聞いたことがあると思うんです。だけれど，自分たちはそういう風にいわない。自分たちのことはウィルタとかニブフなんだと言ってます。それからついでなんですけれどアイヌという言葉がありますね。近年，アイヌは日本の北海道の先住民族ということに認められましたけれど，“アイヌ”っていうのは人間という意味です。だから本来であれば蔑称じゃないんですね。蔑称じゃないんですけれど，日本人が長い間蔑称として使っていましたね。本当はそうではなくて，彼らが誇りを持って自分たちのことをアイヌだと言って使っているわけです。“アイヌネノアイヌ”というのは人間らしい人間という意味なんですね。だからそういう意味でいいますと，ゲンダーヌさんやアイ子さんたちも自分たちのことをウィルタと言うわけです。そしてこのウィルタという言葉が一般化するのはごく最近なんです。また後で詳しくお話したいと思います。

ウィルタという先住民族は，たくさんの民族の中でも比較的早く，時期の詳細はよくわからないのですけど，12，3世紀か14，5世紀にはサハリンの辺りに来ていたんではないかというんです。この人たちは今お話しましたように，古い記録を見ても，戦前，南北合わせてもっと多かったといわれているんですけど，現在，戦争とか通婚が進んで，自分の出自を名乗らない人がいますから，せいぜい300人位だろうと思われます。

4. ウィルタの生活様式

それでどういう生活をしていたかといいますと，トナカイが大陸から渡ってきているわけです。これが季節的に南北に移動するわけですね。自然のトナカイのことをウィルタ語で“ウラー”といいます。そのウラーを飼いならして，そのトナカイが移動するのにあわせて自分たちがついていく。ついていくという言い方はおかしいのですけど一緒になって行くわけです。ですから,“ウィルタ”というのは“ウラーと一緒に生活する人”という意味らしいんですね。それで，トナカイは物を運ぶ手段であったり毛皮であったり肉であったりするわけですけども，彼らは海の動物たちも獲るわけですね。アザラシだとか，トドだとかラッコだとかそういうのを獲るわけですね。その他に魚，魚類をたくさん獲るわけです。ですから狩猟と漁撈を行っていた。陸のものでいうと，クロテンなんかは高級ですけど，クロテンだとか，キツネだとかウサギだのそういうものの毛皮をなめすわけですね。他の民族と交換できる品物だとだいたいそういうものですね。その他に，私たちの野菜にあたる山菜をとるわけです。フキとかワラビとか，秋になれば，キノコとか。そういう生活をしながら絶えず移動。絶えずという言い方はおかしいですけど，長くてもせいぜい十日位同じ場所にいて，移動して歩くわけです。ですから，遊牧を主としながら，狩りをしたり魚を獲ったりするのです。

5. 階級のない社会

社会という言葉を使うと，例えば，日本の社会とか多様な人々がいてそれに対応する仕組みがあったりしますね。けれど彼らのは極めて独自の社会です。極めて単純な社会ですね。つまり,一言で言うと階級のない社会。普通,シャーマン，シャーマンって言ってますけど，彼ら自身はシャーマンにあたる人を“サマ”と言っているのです。サマという人が例えば，佐藤さんとか加藤さんという一族の中にいるんですけど，必ずしも一人ではないんですね。サマが年老いていくにしたがって，あの子とかあの青年をサマにしたらいいなと思ったらいろんなことを伝授するわけです。そうすると一族の中に二人いたり，三人いたりすることもあるらしいんですね。そういうシャーマンっていうのは支配者ではなくて，昔のことからいろんな語りを伝えたり神への様々な所作を伝えたり，手仕事を教えたり猟の仕方を教えたり，生活の先輩みたいな役割を果たすわけで，これは支配者ではないのです。ですから，家族毎単位で言いますけど，斎藤さん一族とか加藤さん一族や田中さん一族といわれる一族の中にも全体にしても階級は全くないわけです。文字通りみんな平等に分けあっています。例えば極端に言うと，魚一匹しか獲れなかったら，それは子や孫にみんな同じ量ずつ分ける。まあ本当に正確に同じ量かは別にしてですね。そういう分けあう共同体的な生活をしている。そういう独自の文化を持っているということについて，これからお話をしていきたいと思っているわけです。そこにその民

族が，父から子へ，母から子へ，子から孫へ伝えてきたすばらしい技術と心があるんですね。

6. ボオについて

それから今，階級がない平等な社会という風に言いましたけれども，もう一つ，この世の中にあるものは全部神様が与えてくれたものだと考えます。その神様の中で一番の神が，まあ一番とか二番とかそういうのはないのですけど，最高の神というか，それが天，“ボオ”というのですね。ボオの恵みを頂いて私たちは生きているから，例えば，使い終わったものを捨てるということをしないんですね。また，返すという気持ちもあるんだと思うんですね。それから，例えばキノコを採りに行っても，“バーバッチュリ”といいますが，「これから林の中に入ります。よろしくお願い致します」と，そして頂いたらまた終わりに，簡単なお礼とお参りをして帰る。常日頃，恵みを頂いてその恵みで私たちは生きているから感謝するのです。神様は一つじゃなくてたくさんいるんですけど，それはいろんな形でいろんなものの中にいるというふうに考えているわけです。

7. 国境や戦争のない社会

それから，この社会の大きな特徴でさきほど移動生活をしていると言いました。ですから結論からいいますと，国境という言葉もなければ戦争という言葉もないんですね。なぜ無いかといえば，道徳的にまずいことだからという意味ではないのですね。彼らは移動するから集落を作ることがないわけです。俗に言えば，部落とか村落というものを作ったことがない。それを集めたような国というものはもちろんないわけです。ですから国境はないわけです。サハリンの島の端から端まで国境がない，争ったことがないわけですね。そういう意味では本当に平和な民族なわけですね。更に，一番他の民族よりも少ないんですね。そういうことも争わなかった大きな要因の一つかもしれませんけど。「とにかく戦争という言葉は私たちにはなかった」と，ゲンダーヌさんやアイ子さんがおっしゃていました。

8. 無知蒙昧な民族？

それから，日本の北海道庁とか何々県庁にあたる樺太庁というところが，北海道にはアイヌという土人がいるし，樺太にも土人がいるというわけです。例えば，北海道には土人として位置付けられたアイヌ民族を縛る旧土人保護法という法律が戦後もずっと生きていましたよね。

ところで，その各県庁が出す産物とかをまとめた要覧というものがあるんですが，そういうものを紹介するときに，北海道のアイヌはこういう土人だと紹介するわけですね。更に，樺太には非常に珍しい土人が色々いるんだとも記述してあります。この民族に関してはどういうふうに表現しているかというと，とにかくあまりほめた言葉はない。これは要覧だけではなくて，いろんな時代に書かれたものがたくさんあります。で，樺太庁自身がどういうふうに言っているかというと，この民族は“無知蒙昧”であるというわけです。無知蒙昧ってわかります？　要するに，ものが何もわかっていない，かつ怠惰である，なまくらであると紹介しているわけです。本当にそうなのか？　全然違うんですね。非常に優れた民族です。例えば，文字を持たないから無知蒙昧なのかといえば，そうではなくて文字を持たないが故に常に記憶するということが小さいときからの習慣になっていて抜群の記憶力があります。それから文字を持たなくても自分たちは絶対少数ですから，自分

たちの周りの民族との関係が言葉の上でも重要になってくるのです。だから，彼らの言葉を覚えるわけです。例えば，1926年頃，オタスの杜という集落が強制的に作られるんですけど，この中にももちろんそうですが，土人教育所が作られて，この中で日本語を覚えなくちゃいけない。その他にギリヤークの人がいる，つまりニブフの人がいる。その言葉も覚えなくちゃいけない。それから革命後亡命してきたロシア人がいる。ロシア語を覚えなくてはいけない。アイ子さんはご主人が朝鮮人。日本の強制連行で連れて行かれてそのままそこに残らざるを得なかった朝鮮人です。だから，朝鮮語も簡単なことは一通り覚えなければならない。いけないというのではなくて，それが身に付いている。

これは北海道の時の話です。港から入ってくるロシアの船員が今でもいますよね。ある時船員がアイ子さんの近くの家まで来て自転車を持っていこうとしたらしいんですね。彼女はそれをロシア語で抗議したらしいですよね。また，ロシアから来た自分の親戚に当たる人も日本語は話せないと最初のうちは戸惑っているのですけど，3，40分したらもう通訳ができる。そういう言語能力が小さいときから育てられていますから，それが慣わしになっています。要するに，多言語生活ですね。そういう頭脳っていうのはですね，本当にたいしたものなんです。

言語能力は，絶対に交易でも必要ですし，友達といえば他の民族の人たちも友達ですから，そういうのを小さいときから覚えていくのは当然だといえば当然なのですが，私みたいに大学は出たけれど外国語はさっぱり使えないというのもいます。だから，出会う度にその言語をしっかり覚えていくというのは，すぐれた能力ですね。

9. イルガについて

それから独自の文化というものについてもっとお話をしたいと思います。こちらにあります“イルガ”です（**写真8・9**）。これはフレップ会の方々と後日お勉強されると身に付くと思うのですけど，これほどまでのものを作るというとなかなか大変だと思うのです。実は，アイ子さんとゲンダーヌさんだけがウィルタですと名乗ってこの資料館を作ったわけですが，お姉さんは「私は日本人になる」ということで日本に来たんです。だから，「ウィルタと名乗らない」というふうに言っていたんです。でも，これはそのお姉さんが作ってくれたんです（**写真10の中央**）。これを作るには色紙を対角線で三

写真8

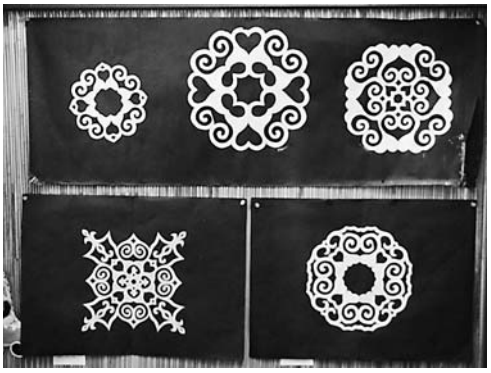


写真9

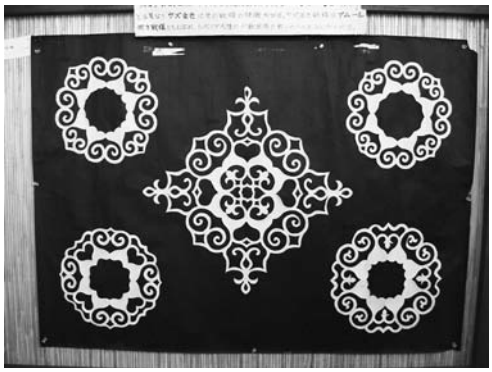


写真10

回折って八分の一にして切る。それは下書きなしで作る。自分の頭の中にあるイメージだけなんですね。まあ，はさみをそういうイメージだけで下書きなしに切り込んでいくわけです。だから，「おばあちゃん，いいなあ，それをもう一つ作って」というのはだめなんですね。作れないんですね。ここにはいくつも作って頂いたものが残っていて，フレップ会の方なんかは型紙としてとっていたりしますから，それを選んで勉強されると良いと思います。でも，私はできません。ぐうたらでやったことがないです。しかし非常に優れているというのは，民族的な伝統として，小さいときからそれが頭の中にあるのでしょう。ですからそれがイメージになって出てくる，広げたらどうなるという予想はついているんですね。そうらしいんです。

イルガの成り立ちは歴史的な経過がいろいろあると思うのです。ずっとアムール川流域を辿って，中国の北部に行きますと，黒龍江省，そのずっと向こうに内モンゴルやモンゴルですね。そういう景観，人々の流れの中で唐草文様がいろんな形で変化していく。更に，アムール川の渦，この波っていうか逆巻く波，あるいはその渦の形が形象になったんではないかともいわれています。それと日本が1905年日露戦争の後始末で樺太の南半分を領有するんですね。そして，土人たち集まれということにして集落を作るんです。土人の居住地を作るんですね。そしてそこに学校を作ったり観光地化するわけです。お土産を作ったりいろんなことをするために，学校でこれらを上手にさせようと指導していたかもしれませんけど，何よりも生きるためのお土産を作るときにこういう紋様が発達していったんですね。だから，北の人たちと南の人たちとちょっとわずかな時の差ですけど，その差から両者の紋様はちょっと違って，南の人たちの中にハートをいかすということが盛んになったんですね。北ではこのハートの形はあまりありません。流れはずっとモンゴルの方にこのハートの紋様はあるんですけど，ハートとして意識していたかどうかはわかりません。しかし，渦巻きやらハートやらいずれにしてもこの多様なものを下書きなしで作るわけでして，帯状のものも蛇腹折りにしてその一部だけを切るわけですね。その折り目のところを切り取ってしまわないようにすれば，同じ形がずっと残りますよね。それとこれはアイ子さんのお母さんが作ったものですけど，ハートがあるわけではありませんが，こういう連続模様ですね（**写真11**）。この一部を作るわけですね。折り目が切れてないわけですから，そこのところは型紙を作るときに下書きをするわけじゃないんです。このあたりの作品もアイ子さんが作ったものです。へんな言い方ですけど，ちゃんと計算して一回り何センチあるからどれだけの大きさでやらなければならないというようなことは全然考えていないんですね。なおこういう服を作るときに物差しは使わない。全部（腕・手・指を使って）ここからここまでとか布の上に印をつけて切っていくわけです。ですから今話したように，一回り回ったらつじつまがあわな

写真11

くなるんですけど，何とかそのへんうまくあわせているっていうだけで形が違いますよね。そういうことは何にも気にしない。それから，この刺繍を他の民族も“イルガ”って言っていますね。紋様というのは一般的にイルガと言うのですが，本当の完成したものは刺繍糸や絹糸で作って服につけたものなどをイルガと言っています。紙で作った元々の型紙もイルガって言ったりしてますけどね。僕は細かくはよくわからないんですけど，チェーンスティッチ（刺繍で輪をつないで鎖のように刺す技法）に非常に似ているんです。でも針の運びが違うと思うんですね。それからダブルチェーンスティッチだとか，研究者によると十種類くらいあるというんですね。それはいずれもヨーロッパのものに，結局似てるんですけど，まったく独自のものがたまたま似てきたということですね。

それから彼らの刺繍の最も優れたものの一つは，皮をなめすというのが抜群にうまいんですが，とりわけトナカイの皮をなめすのが上手なんですね。そのなめし皮に刺繍するんです。その時は表に針を入れて裏に出さない。トナカイの皮の表に刺繍をしますけれど，裏には針が

写真12

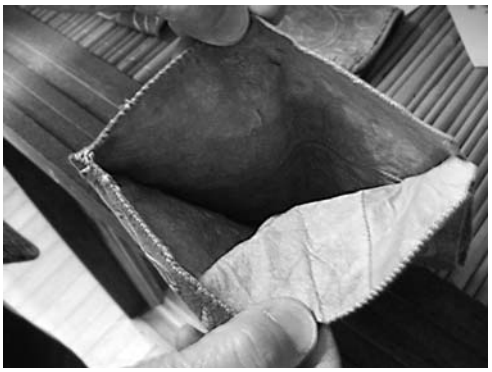


写真13

でないようにしてるんです（**写真12（表）・13（裏）**）。どうぞご覧になってください。不思議なくらい器用に裏に出ないんです。そういう刺繍の仕方をするんですね。それはとりわけ優れているんです。

アイヌの人たちは木の皮を剥がしたら，木の筋が入っています。あの筋をしごいてそして糸にします。その糸で布を織ります。機織をします。これをアトゥシ織りといいます。ところが，ウィルタは織るという技術がありません。そのかわり交易で手に入れた刺繍糸や絹糸を使います。針も布ももちろんそうですね。交易で手に入れるのは，米とか金属やこういう刺繍の道具ですね。これを見たら，怠け者なんていう

言葉で言えるものでは全然ないですよね。現代人なら気の遠くなるこんな仕事をやらないと思うんですよね。

10. ダルドゥーについて

ついでにこの“ダルドゥー”（**写真14**）について話したいと思います。これは男用なんですけど，下着のここに付けるんですね。というのは，彼らの座り方は正座するという座り方ではなくて，片膝立てるか胡坐をかいている。そうすると，スカートみたいな“ホッセー”というのを身にまとうと向かい側でお話をしててもお互いに見えるわけですね，下着が。そこでその前につけるんです。女性用のは少し丸いものになるんです。おまけにアイ子さんの作ったものは真ん中に鈴なんかついてました。こういうものを日本人が偏見を持って言うことの一つですけど，“貞操帯”なんて言ってしまっています。貞操なんてこんなもので守れるわけもなければ，おかしいと思うんです。そういう言葉で平気で紹介するというのはいかがなものかと私は思うんです。

それからこれはズボン，パンツにあたるのかな（**プルー，写真15**）。ちょっと話が飛ぶようですけど，日本の女性がパンティに当たるものを身にまとうようになったのは昭和年代からですよ。それまでは腰衣ですよ。だから彼らの方が早くから使っていたんですね。これにズボンの部分だけを別に作るわけなんですね。そして季節によってここのところにつけるのが皮であったりするわけですね。そこのところがちょっと違うかなと思うんですね。

写真14

写真15

11. ウィルタの衣服

それからついでにこの辺の衣装のお話をしたいと思います。よくこの民族はどういう民族ですか，どういう系統の民族ですかと聞かれるんですけど，こういうのを見ればおわかりになると思うんですね。日本の昭和年代に，日本の皇族の一人がオタスの杜を訪問したわけですね。これはアイ子さんのお母さんがその歓迎の儀式をする時に作ったといわれているんですけど（**写真16**）。生地が別珍ですね。この襟のスタイル，これはアイヌでもなければ日本の和服でもないですね。これを見ると，どういう民族かというのがわかると思うんですね。どういう系統かとかね。想像してみるとね。最近テレビに出てこなくなったんですけど，朝青龍のお母さんですね。アムール川の上流から下流，そしてサハリンの人たちのいろんな民族は大体こん

写真16

なスタイルなんですね。いずれもモンゴル系です。とりわけウィルタは日本人と全く変わらないですね。モンゴルの人も変わらないでしょ。お相撲さんだってわかんないですもんね。この人はモンゴル出身だとか，この人は日本出身だとかわからないですよね。ですからそういう点で見るといずれにしても，モンゴル系というのは衣装だけではなくて，偏見をもっちゃいけないですけど顔形やスタイルも全く日本人なんですね。

12. ウィルタの薬

それからここにあるものをついでにご紹介したいと思います。彼らはシャーマニズムっていってね，サマが神について色々やるんですが，特に病気を治すという習慣があります。アイ子さんがこのお守り（**写真17**）で病気を治すといったから，私が「まじないみたいじゃない？」て言ったらあまりいい顔してくれなかったんですよね。その後，従妹にあたるという人が来ました。毎年NPOの日本サハリン同胞交流協会というのがありまして，日本のご親戚の人に会うために在樺太の人たちが来るんですね。一年

写真17

に一回ないし二回あるんです。その時，アイ子さんの従妹にあたるっていう方が来たことがあって，その方がこれを見た時に，この人は日本語が上手だったのですが，「あっ薬だ」と言ったんですね。なるほどな，単なるお守りではなくて病気を治すから薬と言うんだと思ったんですね。これカエルの形しているんですけど。こっちは何の形しているんだろう，人間のようだかなんだかわからないですよね。これを，「例えば，どういうふうにするの」って聞いたら，何か子どものうちに作っておくらしいんですね。で，5，6歳なり，7，8歳になって，おなかが痛くなるとシャーマンが痛いところをこれでなぞりながら祈祷すると治るというのですね。僕なんかは治らないですね。小さいときから心が汚いから。ひねてますからね（笑）

もう一つこういうものもあるんですね。これは頭にかぶって頭が痛いときに頭の中にいる悪いものがこの穴からでていくというものです（**アーリプトゥ，写真18**）。

13. セワについて

同じような祈祷するものがあるんですけど，もう一つ“セワ”という守り神があります（**写真19・20**）。それは本当は厄除けみたいなもの

写真18

写真21

写真19

写真20

だと言われるんですけど，しかしこれは願いを叶えてくれる神の化身みたいなものなんですね。ボオ（天）は見えません。しかし本当に大きい存在なのです。これは，そうした神に通じる大切なもののひとつです。ナナイという民族もそうですし他の民族もそうですが，例えば，太い木のところとか家の中の大事なところに置いたりとかします。それと家の角や柱のごへいに，ウィルタ語で“イリラウ”というんですけど（アイヌ語は“イナウ”），それを下げたり置いたりするのです（**写真21**）。また，お酒を飲んだりお茶を飲むときに，それらの数滴をピュッピュッと空中に指で弾いてまいた後に召し上がるんですね。そういう神に対するある種のマナーですね。そういうのを忘れない。

それとこのトナカイの木偶は全く祈祷の意味がありませんが，ゲンダーヌさんのお父さんのゴルゴロさんによるものです（**写真22**）。日本名で北川五郎というのですが，ウィルタ名はダーヒンニェニ・ゴルゴロといいます。ゴルゴロさんは彫刻をしっかり作品にするという意識ではないんですね。自分で好きでこういうのを作っている。しかし実にこのトナカイの形がうまくできているんですね。まあこういうのを暇を見てよく作るというのがあったんですけど，

写真22

写真24

いずれにしても非常に器用ですよね。

14. サマの道具，ウィルタの音楽

それからこちらに，踊るときなどにも使う太鼓（“ダーリ”）があります（**写真23，左がダーリ，右がギシプ**）。これは湿度調整のために袋に入れたんですが，こういう写真のようなものなんですね。ここに鳥の形を貼ってつけたんです。シャーマンが祈祷しながら踊る。そしてだんだん恍惚の状態になっていくそうです。アイ子さんの話によると，「この鳥が神のところに行ってまた戻ってきて，いろんなことを伝えるんだ」というふうに言っているんですね。そういうふうに言っているのでそれはそうなのかなと思うんですけどね。これは単純にパンパンパンパンと叩くように見えますけど，そうではなくて太鼓の裏が十字に綱が帯状に張ってあってその中心部を握って裏から叩くと鈍いボンボンボンボンという音になります。この表面をトドマツのいぶしたところにかざすわけです。だんだんだんだん皮がピーンと張ってきます。そうすると，この“ギシプ”で叩くと鈍いボンボンがパンパンと変わってきます。そしてこの縁をコッコッコッと叩きます。ですから，これだけでも幾通りも音がするわけですね。

写真23

そして，これは“ヤークパ”といいます（**写真24**）。彼らは金属を作らないです。だから彼らにとって金属は非常に貴重でした。これは日本人や中国人らいろんな人たちとの交易で手に入れたものなんですね。これを腰に付けて，シャーマンが踊るときに，キシャッ，フワッ，ジャッと，鳴らすわけです。さきほどの太鼓の音とこのザッ，シャという音とこれが見事にリズムになっているんですね。そのリズムの他にあわせる道具として，“ヨードプ”という中が袋張りになっているものがあります。これはウサギの皮です（**写真25・26**）。それとこれはよくご覧になったらわかると思いますが鮭の皮です（**写真27**）。袋張りになって中に小砂利が

写真25

写真26

写真27

入っているんですね。そうすると，中でシャシャシャシャシャシャシャシャと，高いところにかざして下の方へシャシャシャシャシャシャシャシャとするわけですね。それを何人でもやるわけです。輪になって，シャーマンが太鼓を叩いてお尻をふって，カシャカシャカシャカシャと見事なパーカッションですね。そういう演奏をするわけです。演奏するという言い方をしましたが何か人に聞かせるというわけではないんですね。自分たちが祈るのです。いずれにしても，彼らは宗教的行事であると同時に自分たちの音楽，芸術的な文化を守っていたわけですね。

15. アイ子さんと歌

アイ子さんは踊るのが特別好きな方だったんですよ。で，アイヌの人たちのところに行っても，集会の時に「わしも踊る」と言ってね。そして，一人で踊るんですね。舞台に上がってね。そういうこともあったんです。僕が「踊るんだから歌もあるんでしょう？」と言ったら，彼女は「ウィルタには歌はない」って言ったんですね。僕はこのことについて今まであまり話ししなかったんだけど，最近非常に重要だなと思っているのです。つまり，日本人学校で教わった歌というのは日本の歌ですよね。それから，当時の大人たちが歌った歌というのは日本の流行歌なんです。ウィルタの歌がないんじゃないのです。北大が呼んだ先の三人の方，一人はニブフの方だったんですけど，この人たちが来てくれた時に歌を歌ってくれたんです。ウィルタには歌がちゃんとあるんです。だけど，アイ子さんが生まれたのは昭和3年（1928年）で，土人教育所ができたのは昭和5年（1930年）。彼女が日本人学校で国語とか算数とかいろんなものを習ったかもしれないけど，音楽なり歌なり決していい思い出になっていないわけでしょう。それと，オタスという所に居住地を設定されてそこに集落を作らされるわけですけど，そこでシャーマンを中心に踊りを披露することがあっ

たそうなんですね。だけど，本当の意味で歌うというのがなかったんですね。そういう意味で，日本人は遊牧をやめさせ，つまり生業，生きていくなりわいとするものをやめさせただけでなく，彼らから文化も奪った，そういう一つの例ではないかなと思うんです。先ほどのサハリンから来た人は非常に歌が好きでした。当時の流行歌も歌うんです。戦中戦後のロシアを紹介するカチューシャだとかいうような歌もね，非常に好きで。でもアイ子さんには歌はないのです……。

写真29

16. 樺太アイヌの文化について

ちょっと横道にそれますが，これらは“イミー”と言います（**写真28・29**）。ここの副館長をやっていた金谷さんという人の奥さんが作ったものです。金谷フサさんという方です。この人は藤山ハルさんという樺太アイヌの民族的な文化の伝承者の娘さんだったんですね。この方の作った紋様はウィルタとは全然違いますね。基本的にアイヌの紋様です。アイヌの紋様はこういう数学で使う中括弧のような紋様です。そして布を貼り付けてそれをかがっていく。切伏せといいます。北海道アイヌの人たちの衣装は基本的には和服に非常に似ていますよね。ですけど，これ見ると和服とまた違うんですよね。真ん中でボタンの付け方といいますか，これは大陸の様式だと皆さんたちもわかると思うんです。全然違いますよね。北海道のアイヌとも日本人とも全然違いますよね。どこの人たちだろう。中国の北部かな，満州族かなと思ったりしますね。また，これなんかは正面側は和服のスタイルですよね（**写真29の前側の服**）。だけど紋様は明らかにアイヌ紋様ですよね。ですから，樺太アイヌは北海道アイヌと似たアイヌ紋様を持っているんです。ウィルタの他にニブフだとか他の人たちは，どちらかというと，ウィルタに近い。もちろん服のスタイルもウィルタに近いし，こういう渦巻きのような紋様も。あとこれはウィルタのものではないんです。ニブフとかナナイのポクト（服）ですね。ですから，アムール川流域の民族がいろんな形でサハリンの民族と関わってきたことがわかると思うんです。

写真28

いろんな優れた技術があるんですけれども，ここも樺太アイヌのものなんですが，“トンコ

写真30

リ”という楽器です（**写真30**）。さっき話した藤山ハルさんの娘さんのだんなさんは日本人だったんですけれども，奥さんのお母さんである藤山ハルさんからいろんなことを教わるんですね。それで，イサパネ・ヘンケ（人の上に立つ人・長老の意）というアイヌ名まで頂いたんですね。その方がトンコリという楽器の使い方を常呂でずいぶん普及したんですね。コロコロとなるこの音は全く音楽的なものではありません。これは作り手の人が共鳴箱を完成させる前に普段からきれいな石を取っておいてここに入れて蓋をするんですね。そうするとこれがきれいな音の魂になってくれるそうです。ですから，演奏を始めた時，その姿勢でいかなくてはいけないですね（**写真31**）。でも，このくらいの傾きだったら音はしないかもしれないですけど，今流行の歌みたいにこんなふうに立てたり寝かせたり振ったりすることはできないですね（**写真32**）。この紋様も樺太アイヌの紋様なんですね。これは五弦琴で真ん中が太くて端にいくと細くなる。実は，このお嬢さん方はですね，お母さんから習って戦後ずっと演奏の方法を知っていたんです。まだ健在ですけど。「すっかり

写真31

写真32

やらなくなったからもう弾けないわ」，というふうにおっしゃっているそうです。北海道アイヌは明治以後急速にこれが廃れるんです。でも，今復活しているんですね。個人でも演奏するし，バンドっていったらおかしいですけど，何人かでも，演奏するんです。とにかく樺太アイヌの人たちは戦後まで持ちこたえました。それとこの楽器の部分なんですけど，頭とか首とか胴とか人間の体になぞらえて呼び名があるんです。

ついでに，北海道アイヌは“ムックリ”，口琴とも言います。これはシベリアの人たちにも，それから世界中にもあるんです。樺太アイヌの人たちも北海道アイヌの人たちも竹で作るんですけど，樺太アイヌの人たちは“ムックン”と言っているんですね（**写真33**）。全く同じです

写真33

写真35

写真34

写真36

けど，そういうのがあります。それから，ここにあるのは樺太アイヌのものですけど，こういうヒゲベラは非常に似てますね。

それから，この資料館ができるときに，地鎮祭というのをやりました。それをウィルタ式にやるときに，北川源太郎さんが作ったのがこれなんですね（**写真34**）。これを中心に据えて舞いました。また阿寒のアイヌの人たちが来てこれを使ってやったんですね（**写真35**）。更にこれは先ほど言った樺太アイヌの副館長の金谷さんが作ったんですね（**写真36**）。何かみんなどこかしら似ているというか。

17. ウィルタとトナカイ

皆さんは，犬や猫を飼ったりはしますよね。また，日本の農民は牛や馬なども飼ったりはしますけど，トナカイを飼うということはないと思うんですね。ウィルタのように，トナカイを例えばお宅で十頭くらい飼ってそれでここに一週間〜10日位居てまた移動するとします。さて，トナカイを逃げないようするにはどうしたらよいか？　寝ずの番をしてもだまってたら逃げていきますよね。どうしたらいいんでしょうか？　だじゃれた話ですけど，良い柵（策）はないかと（笑）。柵を作るというのはあるかもしれないですけど。林の中だったらロープを回してということをおっしゃる方もいるんです

けど，それもやらないわけではない。木があまりなかったら杭を打ってそれをひっぱって繋いでおくというのもやらないわけではない。中には面白い人がいて，木に長いロープをつけてトナカイの角をすべて結んでいったらいいんではないのという。これはまあやらないと思うんですけど（笑）。いろんなアイデアを皆さん言ってくれるんですけど，ゲンダーヌさんもアイ子さんも「実はこの“チェーンガイ”があればいいのさ」と簡単に言っちゃうんです。これは柳の，六月頃の若い枝で作った“カイガリ”です（**写真37**）。この枝を取ってきてキュウーッと首に巻いて首輪にしちゃうんですね。頭も抜けないくらいぐーっと絞りますね。そして角あるからもちろん抜けません。これ二本くらいぎゅっとして立派な首輪を作りますね。その首輪にチェーンガイをぶらさげるんですね（**写真38**）。首のところからこれをぶらさげるのですが，ここのところは，前脚の弁慶の泣き所と言われますね。すねが痛いでしょ。これを下げると，前脚のここのところにちょうどぶらさがっているわけです（**写真39**）。右脚を前に出すと左脚にカンとこれがあたりますね。左脚を

写真38

写真39

写真37

前に出すと右脚にカンとあたるでしょ。痛いから，これに慣らされたトナカイは首からこれをストッと下ろされたらもう動かなくなるんですね。なかなかいいアイデアだと思うんですね。でも，草を食む自由はあるんですね。けれど，大股で歩く，逃げるというのはできなくなる，やらなくなる。10頭といいましたが10組必要なわけではないんですね。お母さんにつけとけば子どもはついていく。親分格のやつには，カーガルダというんですけど，これをぶらさげるんですね（**写真40・41**）。首を振るとこれがカランカランと音がするんですね。だから，自分た

写真40

写真41

ちがテントの中にいても外にいるトナカイたちの様子で人や何かまずい動物が来たんだというのがわかるというんですね。こういう知恵というのは,トナカイの話だけではないんですけど,自然の中で生きてきた彼ららしいですね。そういう知恵はたくさんあるんですけど，時間もないので次に行きましょう。

18. 死後の世界？

優れた技術はいろんなのがあるんですけど，やはり独自の文化だな世界観だなと思うものの一つに，お墓やお墓参りがあります。例えば，あなただったら死後の世界をどのように考えていますか？　日本人はあまり具体的に考えたことがないのでは？（会員の数名から「考えたことないです。」という反応)。

来世には行ったことないし。だじゃれた話ですけど，三途の川に橋がかかっていない。僕は泳ぎが出来ないから渡れないんだって言っていますけど（笑)。要するに，極楽だとか地獄だとかというイメージがあると思います。そういう感覚を持つ日本人は，土人は死んだ人に非常に冷淡だとか，あるいは，つながりというものに対して淡白だというふうに言っているんですね。本当にそうなのか？　冷たいかというとそうではないんですね。ゲンダーヌさんに聞いたんですけど，アイ子さんもそうですが，二人とも「それは違う」と言ってました。彼らは，人が亡くなると土葬にするんですけど，冬の間土葬するのは大変ですから亡骸をくるんで他の動物に食べられないように木に縛って置いたりするんですよね。風葬だのという説もあるんですが。おじいちゃんが亡くなった時，最後のウィルタらしい土葬をしたんですよ。この網走の卯原内墓地にあります。恐らく1978年のことです。法的にも行政的にも絶対といっていいほど土葬は認められない。ところが，土葬したんですよ。実は,土葬された人は,眠って眠って眠って眠って眠って神様になるというふうに信じられているんですね。日本人は，5年たっても10年たっても15年たっても，先祖代々の墓だとか何々家の墓だとかお参りを続ける。そしてあの人が生きていたら大きくなってるだろうねとか，あの人きれいだったからいろんな人にプロポーズされたんじゃないかとかね。弦巻さんだったら誰も近づかなかっただろうね。女性と薄い縁だったよね，とか言ってるかもしれないですよね（笑)。だけどウィルタの場合，ずっと眠り続ける。眠り続けるんだけど，アイちゃん（北川アイ子さん）の話だと，3年ないし5

年位までに魂が一度この世を覗きに来るんだそうです。そして安心して戻ってまた眠り続けるそうです。そして神になっていくのです。それなのに，5年だの6年たってね，あの人が生きてたらああだとかこうだとかとね，言っていたら安らかに眠れないって。だから，亡くなった人のことを考えれば考えるほど，考えるからこそお墓参りはそこらへんで止めていいんだということなんですね。日本人の物差しで冷淡だとかなんとかってね，大体それは間違いです。やっぱり極楽はあるんですと頑張ってみてもね。どちらが正しいかって言ってもダメです。そこは認めなくちゃいけない。

19. 自然との一体感

また，自然との一体感というのがありました。彼らの生活というのは本当に自然の中で生きてるわけですね。僕にもいろんな例があるんですけど，一番お話する例として，キノコ採りで蛇がでてきたときの話です。彼女とお姉さんと一緒に行ったときにも出てきたんですね。それが僕らの方にずっと向かってくるのがはっきりわかったんですね。僕はあわてて木の枝かなんかないかって探してね。それで蛇ってよくわからないけど，棒でぎゅぎゅっと巻いて捨てりゃいいと思ったんですけどね。どこかに棒はないかって探したら，「先生，そんなことしなくていいんだ。やめやめ」って言うんです。蛇がグーってやってくるでしょ。すると「おまえの来るところじゃない」ってこうなんですよ。蛇に分かるかどうかわからないですけど，「おまえの来るところじゃない」と二人でそう言うわけですよ。そして，アイちゃんが一生懸命，かま首っていうんですか，そのやってくる奴の頭をなでるっちゅうか，向きを変えて「そうだ。おまえの行くところは向こうだ」と言うのです。そういうやり方って非常におもしろいなと思いますね。

それから朝早く行ったにもかかわらず，鹿のウンチがありましてね。「ああ，わしらより先にうまいもの食べて行ったわ」って言ってんですよね。本当に，遅く来て失敗したなという感じで言ってるのではないですよ。損したってわけでもなく，取られて残念がっているというわけでもないんですよ。彼らは彼らで生きていくというそういう考えなんですね。

そして，お兄さんのゲンダーヌさん。この建物の前は，ご存じだったと思うんですけど，ずっと長屋だったんですよ。ハーモニカ長屋のように公営住宅だったんです。そこに住んでいたんですよ。目の前の川の土手が低くて柵が無かったから，ずっと歩いて行ったら，川でシジミはすぐ採れたんですね。それから，釣り糸を降ろせば，川ガレイなんかも釣れたんですね。それで，ゲンダーヌさんも釣りに行ったんですが，一人前位釣ったら止めて来たんですよ。「どうしたの」って聞いたら，「キツネがでてきて「オレの分も残しとけ」って言ったから止めてきたんだ」って言うんですね。

子どもたちの前で歴史の一証人としてお話をしてもらったことがあるんですよ。そしたらね，後で感想文に，「ゲンダーヌさんはキツネの言葉がわかるんですか？」って書いてあったんですけど，そんなような話はいろいろあるんです。

20. 北川アイ子と日本・日本人

それから彼女，北川アイ子さんなんかはイルガをしょっちゅうここで作っていたりして，その民族的な伝統技術を残したいと思っていたんですけど，その他に，戦争体験を語ったりしていたんですね。それを聞けば聞くほど日本が植

民地時代に彼らをどう扱ったのか，戦争でどんなに辛い思いをしたのか，そして彼らが自分たちで選んだんではなくて日本という国に翻弄されたということがわかるんですね。戦争というものに翻弄されたのです。そういうことを思えば「本当は，日本人とか日本の国というものに対して本当に憎らしいとかね，恨んでないかい」と聞いたことがあるんです。そうしたら恨んでるという言い方ではなくて，「お父さんのサマ，シャーマンがね。日本人も日本という国もボオが作った。天が作った。だから仲良くしなくてはいかんって言ったからそれを守っている」と言うんですよ。けれども，やはり彼女の言葉の端々には，戦争とは，日本という国は何だろう，天皇って一体何だろうっていう疑問が見え隠れしているんですよね。そして日本人が土人って古い生活していたんだなってよく言う偏見に満ちたような対応，それだけではないですね，後でお話しますが色々な差別があるわけですね。あったわけですね，戦争の時には特に。日本人に対する恨みはゼロではないわけですよ。いろいろあるわけです。けれど，一方では戒めの言葉としてね，お父さんの言葉を守ってますね。

21. 再びウィルタや樺太アイヌの文化

なぜサハリンにいる少数民族が日本に来たかという話に入りたいのですが，その前にもう少しだけ別の話をしたいと思います。これは樺太アイヌの藤山ハルさんの娘さんの金谷フサさんが作ったものです（**写真42**）。同じように下着の前につけるのがあったわけですね。そういう習慣があったんですけど，残念ながら，おばあちゃんのおばあちゃんの代でだんだん消えていった。ところが，お嫁にだすときにね，何か持たせたいなという気持ちになって，これの小さいものを作ってここに置いてあるんです。そ

写真42

れで，なんでこんな小さいのがあるんだろうと思って，アイ子さんに聞いたら，こういう理由なんですね。ある時女子学生の人が来て「欲しい」ってアイ子さんにねだったんですね。「いいよ」って言ってあげちゃたんですね。それで僕が「まいったな」と言ったら，アイ子さんは「わしがかわりを作る」って言って作ったんですよね。ところが作った文様がウィルタ文様なんですね。元のものは樺太アイヌの文様ですからやはりウィルタとは違うんですね。

それと，たぶん北海道では“マタンブシ”，樺太アイヌは“ヘバカリ”というんですけど，裁縫をするときに，汗や髪の毛が落ちてこないように髪におでこにやるんですね。それから，大体そうですね，普段でもこういうのを着けていたりします。

あとこの資料館の周りの白樺の木の皮がところどころ剥がれているでしょ（**写真43**）。えらい汚くなっているんですよ。あれ，「やめなさい」と言ったんですけど，彼女がやめないんですよ。「他の作品はどこで材料手に入れた」って聞いたら，刑務所の所有林の中に入ってその白樺を削ってきたんですって。刑務所だからかなり勇気があると思うんですよ。で実は，資料館の周りの白樺も皮を剥いでね，それを二枚ほ

写真43

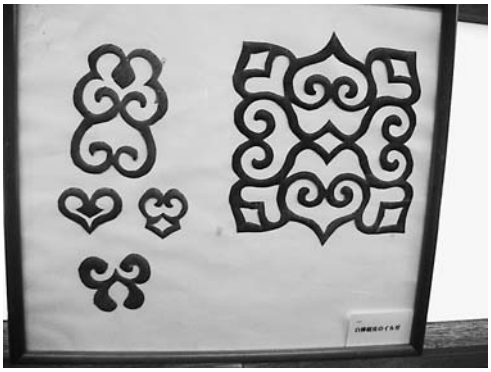


写真44

ど表を剥ぐと薄い紙のような部分が出て来るんですよ。それでこの額縁の中の紋様を作ったんですね（**写真44**）。

あの人たち，白樺細工が非常に上手です。この“フルマウ”なんか典型的ですけど（**写真45，左がフルマウ，右が食器入れのモロチョー**）。白樺で中を作ってですね，例えば，アザラシの毛皮でおおっちゃうんですよ。すると，雨風に強いものになりますよね。それでこれに衣装入れたり，それから食器を入れたりしてね，トナカイに背負わせて運ぶわけです。そういう白樺細工が非常に上手なわけです。

写真45

写真46

それに金属というものが非常に貴重なものですから，もらったり交換したものを最後まで使うんですね。これはちょっとおもしろいんですけど，釣りをする時に，針とおもりが一緒なんですね（**写真46・47（針とおもりの拡大写真）**）。針の返しが無いものですから，緩めると魚が逃げちゃう。だからこうやってこうやって巻いて止めないで引き上げっぱなしでいかなきゃならない。そんなにうまく行くのかなと思ったんですけど。そこは要領で二本こうやって巻き上げてちゃんとやるんだと言ってましたけどね。

あとこれは，“ダパー”という1人用のカヤ兼テントです（**写真48・49（ダパーを広げた写真）**）。林の中に入って，大変蚊が多いので，

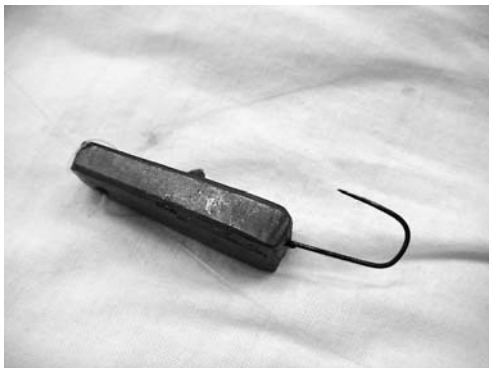


写真47

写真48

写真49

日陰を作ったり，夜なんかをこの中で過ごす。この資料館にあるのはモノの文化で，時々心の文化もお話しましたけれど，それではなぜ彼らが網走に来て，こういうことをすることになったのかということをちょっとお話したいと思うんですね。

22. ウィルタが網走にいる理由

この地図（後掲・配布資料）のところでわずかに見えるようになっていると思うのですが，ポロナイスクと書いてあってその上に細い線が一本あると思うんですね。それが北緯50度です。それで網走は北緯44度くらいですね。

明治の初めからずっと千島列島と樺太はロシア人もいる，いろんな民族もいる，日本人もいると混在していたんですね。ですけれども，1875年，日本とロシアは千島樺太交換条約というのを結びまして，千島列島はカムチャッカの付け根の占守島という所まで日本領にするんです。そして，サハリン全体はロシア領になるんですね。ところが，日露戦争の後始末の条約，1905年のポーツマス条約で，この北緯50度から南は日本が領有，つまり，植民地にしていいということになるわけです。それで日本がここで開発を始めるわけですね。農民も渡りますけど，漁業者たちも来ますね。林業も盛んになりました。それから鉱山も開発しました。どんどんどんどんやっていきますが，1945年，昭和20年までの40年間が植民地。そのちょうど半分の時ですね。1925年，大正15年です。その年にですね，ここにいるアイヌ以外の少数民族は集まれということになったんです。それがポロナイスクの郊外のオタスという所です。あそこに写真があるのはオタスに行ってきた旅行会社が写してくれた風景です(**写真50**)。ゲンダーヌさんやアイ子さんは，「（ジャッカドフニの前の）この土手から上がってみると茫洋とした風

写真50

写真51

景が似ていて非常に懐かしい」と言っていました（**写真51**）。ポロナイスクというところは日本人が開拓した時には敷香と言ってましたけど，その敷香の郊外にポロナイ川とシスカ川に合流する地点の中島のような形である“オタス”（アイヌ語で“砂地”という意味），そこに居住区を設け，お前たちはここに住めというわけです。トナカイの遊牧は止めろ，狩猟採集も勝手にやるなということで，集落を作らされるんですね。これが土人部落です。そしてこの土人部落をのちに“土人の杜”と称して観光地にするんです。そしてその土人の杜に5年後，昭和5年（1930年）になるかな，土人教育所を作るわけです。まあ九月から開校するわけです。そこでは算数とか国語とか他にも裁縫とか教えたと思うんですけど，その土人教育所で一番力を入れたのは，日本人化教育です。いわゆる天皇の民になる皇民化教育です。朝鮮族とか台湾族とかもみんななっとる，お前たちも負けないようになれと。そして，天皇のために生き天皇のために死ぬという生き方が美しい生き方だというのを徹底して教えるわけです。それが満州事変とシナ事変といわゆる通称ですけど，日中戦争が始まった時と太平洋戦争と続いて行くわけです。そして終戦になった時にですね，彼らはどうなるかってことですよね。実は，太平洋戦争が始まった翌年，昭和17年，1942年に，青年たちに召集令状が出るんですね。日本の軍隊の一員になれというわけです。いよいよ天皇陛下の軍，皇軍の一員になるというわけです。そして，軍隊の物を運ばさせられる者もいれば，北川源太郎さん（ゲンダーヌさんの日本名）や何人かは国境線に並べられるわけです。彼らはツンドラ地帯を歩くのが非常に上手ですし，もともと国境なんてのが頭にないですから，向こうの方に行ってみたり戻ってみたりして，ソビエト軍の情報をキャッチするのが非常に上手だということで，彼らを使うわけですね。簡単にいえば，諜報活動に使うわけです。スパイ活動ですね。ところが終戦になったら，ちょうど満州で起きたように，日本軍が先に逃げるんですね。そして開拓民を守らなかったんですよね。だから満州では，開拓民のお母さん方は何とか子どもをね，中国の人たちに預けたりね。あるいは，棄てたわけではないかもしれないけど，置いて行かれて，中国人に保護されてね，それが中国残留孤児になるわけですよね。

樺太でも日本人でさえそうした軍隊ですよね。先住民に対してこう言うわけです。「お前たちはもともとここの人間なんだ。日本人じゃ

ないんだから引き揚げる必要はない。お前たちはここにいれ」，って。それで青年の北川源太郎や何十人かの人たちは，銃を持ったまま，いよいよ天皇陛下のため国のために戦う時が来たということで，無謀にも戦ったんですね。それで，ものすごい犠牲が生まれたんです。恐らく，6，70人か80人だろうと言われてますが，名前わかんないんですよね。わからない理由はまた後で言いますけど，その内，何人か何十人か残って，それがソビエト側の裁判でみんな有罪になるんです。それは非常に粗末な裁判ですね。要するに，労働力として，シベリアに抑留するための裁判なんですね。そしてラーゲリ（ロシア語で“収容所”の意味）の生活で重労働することになるのです。

北川源太郎はスパイ罪で一番長い9年6ヶ月の刑を受けるんです。その刑を受けて，シベリアでも多くの仲間が死ぬんですね。けれども，彼は生き延びた。そしてこの数ははっきりしているんでしょうけれども，日本政府は明らかにしないんです。とにかくソ連側に言われたことは，「お前らは日本のスパイだった。手先だった」ということです。源太郎さんはもしサハリンに戻ったら，同じことを一生涯言われると考えたそうです。そして，自分は日本人にしてもらえたんだから，日本に行ったら，ごくろうさんと言ってくれるにちがいないと思って，日本の舞鶴からあがるわけですね。それからちょっと転々とする。先に戻っていたお兄さんが稚内にいたりして。そして色々な事情があるんですけど，網走がいいだろうということになって網走に住むことになったんです。

そして，3年後に，お父さんとお姉さん家族を呼ぶんです。更に，9年後に，妹さん家族を呼ぶわけです。妹さんのアイ子さんがこちらに来た理由は，民族的な差別よりも，「みんなシベリアで死んだのに，お前の兄貴がシベリアから元気で日本に行ったって言うのは，きっと抑留先の収容所でうまいことやったに違いない。だからこっちさ（サハリン）帰れないんだ。だから日本に帰ったんだ」と言われたことにあるというのです。そんな兄ではないということで喧嘩になったりしたらしいんですね。男の酒飲みたちに殴られたこともあるらしいんですね。

彼女はその頃一度は結婚するんですね。キーリン族という少数民族の人と結婚するんですよ。けれども，その人もソビエト軍に捜査されて連れてかれたんですよ。当然戻ってこないもんだと思ってね，朝鮮人のゴンさんという方と後に結婚するんです。そして子どもを産む。五人の子どもを育ててる最中に兄から連絡があり，それで網走に来るわけですね。そしてここでの生活を始めるわけです。

その頃私は北見市にいたのですが，大先輩の先生や市民の皆さんと共にオホーツク民衆史講座というのをやっていました。そこで，特別講座として『オロッコの人権と文化』というのも開講することになりまして，田中了先生を講師，ゲンダーヌさんをゲストに，お話を聞きました。ゲンダーヌさんには民族や戦争体験というものを証言してもらったのです。その時には，彼は，「先生方に一生懸命やってもらってますが，私たちは2〜300人しかいない民族ですからどうせ消えて行くんです」と言っていたんですね。しかし，本人がそう言っているんなら仕方がないじゃないのというわけにいかなくなったんですね。そこにいた女子高生の方が「先生方話を聞くだけでいいんですか」ということになったんですね。それでいろんな人々の協力や研究会を重ねて，『オロッコの人権と文化を守る会』を作り，運動の中心になった田中了先生たちとの運動を通じて，活動していくこ

とになるわけです。北川源太郎さんは，軍隊に行った者は軍人恩給がもらえるんだということを知って，日本政府に請求するわけですね。ところが，日本政府からはまともな返事もないわけです。それで市議会と市長さんに訴えたら，もらえて当然でないかということで，国会で問題にしてもらうわけですよ。国会で論議したときに，源太郎さんもサハリンから戻ってきた上官たちのこと知っていたので連絡を取り合って「国会に出てくれ」と言い国会で会ったわけです。「間違いない，これは樺太の土人でした」ということやら「召集令状でシベリアに行って戻ってきた」ということを，彼ら上官たちが証言するわけですよ。だから，北川源太郎さんは当然軍人恩給出るもんだと思っていたんですね。ところが結局，昭和51年，1976年に，これは裁判みたいですよ，厚生省の判決という文書が出て，「軍人恩給請求却下」と書かれていました。なぜかというと，北川源太郎という名前は土人部落や土人教育所といったところで使った土人に与えられた名前であって，正式な戸籍法に基づく国籍を与えた訳ではないからだというのです。その国籍のない者に当時の政府は召集令状を出さなかった。ダーヒンニェニというのは北の方から来たという意味なんです。だから北川にしたんだというのです。他にも小さい川の人々ということで小川とか改姓し，ゲンダーヌというのは，土人名だから源太郎にした。お父さんのゴルゴロは五郎にした。北川五郎にした。いろんな名前をつけたんです。それが全部土人名簿であって，日本の国籍を与えたものではないというわけです。日本の召集令状は与えられていないので，日本軍に在隊したとは認められないと。従って，日本政府としては軍人恩給に該当しないというわけですね。そして却下する。そういう返事が来るわけです。

その後ついに，ある集会で，北川源太郎さんが「（日本人ではなくて）ダーヒンニェニ・ゲンダーヌという民族の名前に戻ります」と言いました。そして更に集会を重ねていくうちに「三つのことをかなえたい」と夢も発表するわけですね。一つは，どんなに小さな民族であっても，自分たちの文化があった。言葉があった。それから世界観を持っていた。そういうものを残す資料館が欲しい。それから二つ目が，日本の政府がやってくれないけれども，サハリンの国境とシベリアで死んだ仲間の慰霊碑を作りたい（**写真52（表側）・53（裏側）・54**）。それと三つ目が，自分の許婚がサハリンに残っている，他の人と結婚したらしいけれど，当時の仲間もいるし，多くのそういう人たちに会いたいと。それを，みんな実現したんです。昭和50年代にね。ちょっと後先になりますけど慰霊碑にはサハリンから持ってきた石も埋めたらしいんですね。小石をですね。そういうことをやってしかし，残念ながら，昭和59年，1984年です。彼は突然ここで急死したんです。脳内出血です。

それ以後の話として，閉鎖するか閉館するか，

写真52

写真53

写真54

という話も出たんですね。アイ子さんも病気がちだったものですから，そういうこともあったんですね。でもやっぱり続けよう，また頑張って続けようということで現在に至るわけなんですね。非常に残念ですけれども，未だに，日本の政府はこの少数民族をこんな風に扱ったということに対する謝罪もしておりません。それから軍人恩給も認めません。名前は日本人になりきっていますけど，向こうにもこちらにもお墓があるだろうし，親戚もね，中国の残留孤児のようにそういう人たちがサハリンにいるんですよね。そういう人たちとこっちの人たちが再会する機会を日本政府で設けて頂けないか，その位の費用は出してくれないかと訴えてもそれも認めない。また，どんどん伝承者が少なくなってくるから，こういう資料館をサハリンでね，なんとか支援してもらいたいと言っているんですが，それも認めない。残念ながら，さっきも言ったように，ゲンダーヌさんやアイ子さんがやった方が早かったんですね。サハリンよりはですね。サハリンというかロシアという国の在り様のことですから難しいかもしれませんが……少数民族たくさんいますから，なかなか独自の文化を守るというのが大変なんですね。

実は，様々な運動の初め頃，『オロッコの人権と文化を守る会』という名称でしたが，まもなく『ウィルタ協会』というふうに改名しまして現在までやってきました。例えば，その中でアイ子さんが刺繍をやり始めて，そしてゲンダーヌさんが亡くなった後もずっとやって，それが一つの流れ，大きな流れとして，現在の『フレップ会』にもつながってきたんですね。

大変残念なことですけれども，アイ子さんは狭心症だとか病気がちだったんですけれども，頑張っていました。しかし，4年前の2007年，平成19年，亡くなったんです。ですが，この資料館は続けようということで，今は土日だけ開けているんです。維持していくの大変ですけれども。そういうことで，私たちはぜひみなさんに，このような網走らしい網走としての文化を知ってもらいたいのです。お土産やいろんなものに利用されているという事実も知ってほしいのです。

例えば，「北天の丘・網走湖鶴雅リゾート」ってあるでしょ。また，道の駅などがあるでしょう。そういうところに入ると，北方民族のスタイルやデザインが色々あって，観光目的でもいいから残してくれという意味じゃないんですけ

ど，ぜひ貴重な文化として，網走の財産としてね，受け継いでいく方々がいらっしゃることはいいなと思うわけです。

私は，さきほどのお墓の話じゃないですけど，シャーマニズムというのはわからないですよ。それからなかなかわからないことたくさんあります。でも，それが間違いとか正しいとかではなくて認め合うということが本当に仲良くなる第一歩だと思うんです。アイヌ民族も含めて，今，日本にいろんな民族の人たちがいますし，ニューカマーといった新しく入ってきた民族の人たちもたくさんいます。でも，私たちはどちらかというと，そういう人たちと理解しあうのがあまり上手じゃないと思うんですね。そういうことを通じて，僕らは民族の一人一人の歴史を担っているという風に考えて，理解しあうというか認めあうということを……理解しあうという言い方は正しくないかもしれない。理解しあうというのはそう簡単にできることではないから。だけど認めあって，そして一緒に生きていくということを大切にしたらどうだろうかと思うわけです。

お話したいことはたくさんあります。エピソードもたくさんあります。でも，エンドレステープの繰り返しのようになったりするかもしれません。また，内容があまり豊かではないというか，愛想っ気がなかったかもしれないです。ですが一旦終わらせて頂きます。

どうもありがとうございました。

（会員の皆さんから拍手）

（その後一言追加）

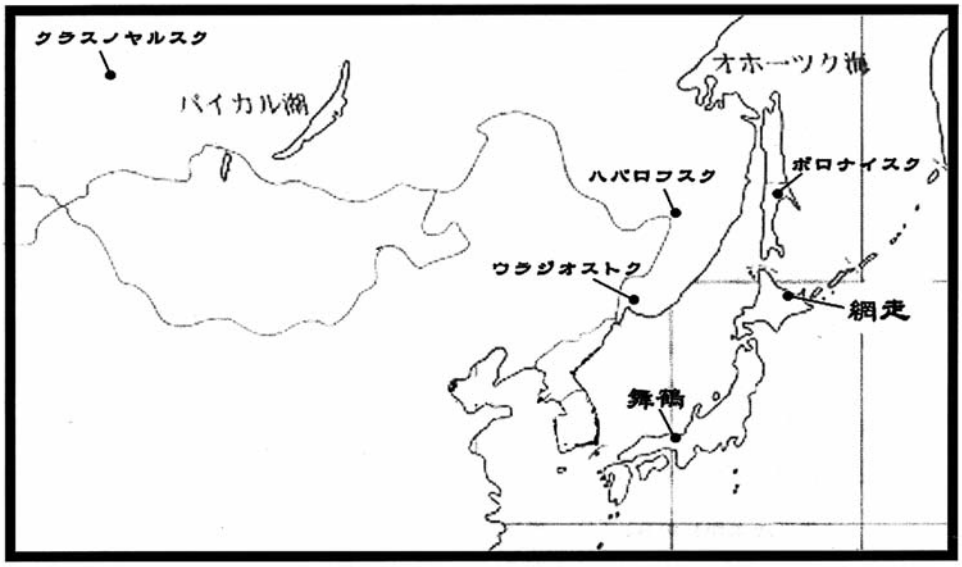
日本に来てからね，周りの人から特に具体的な差別というものがあったわけではないんですよね。だけれども，あの人たちは戦前の生活とその後の，戦中戦後の一時期の混乱の中で，ウィルタ民族というのは惨めだなと思わされることがあったんですね。それでほとんどの人たちは自分たちがそういう民族だということを，要するに，血筋を明らかにする人はいません。実は，北川アイ子さんのお子さんたちや他にもまだいるんですね。それから先ほどギリヤークと言ったニブヒの人たちもおります。私もお会いしたことありますけど，まあそういう人，どこに行ったかわからなくなった人もいますけど，誰も名乗りません。先ほども言いましたように，見た目は，日本人と全く同じですから。だから，私はあの人はそうですかと聞かれてもそうだとは言わないし，あの人たちも自ら言わない限りなかなかわかりません。

配布資料「2010. 10. 12　資料館ジャッカ・ドフニのご案内　弦巻宏史」

2010. 10. 12

資料館ジャッカ・ドフニのご案内

弦巻　宏史



1．ウィルタ民族とは

①ロシア共和国サハリン州サハリン島の先住民族。
②世界の最少民族のひとつ。現在、およそ300人くらい。
③本来は、トナカイの遊牧。狩猟、採集の生活。
④独自の社会・独自の文化やすぐれた技術をもっている。
（ア）全てのものは、ボウ（天）の恵み。
（イ）人々に階級はない。平等な共同体。
（ウ）争いをしない「国境」「戦争」という言葉もない。
（エ）文字をもたないが、すぐれた言語能力。
（他民族の言語を覚え、交易し、友好的に暮らす。）

2．独自の文化やすぐれた技術の例

①イルガ（紋様）
②刺しゅう
③白樺の樹皮細工
④チェンガィニ
⑤墓や墓参について
⑥自然との一体感
⑦日本も日本人もボウがつくった。

３．なぜ日本に

・1905（明治38）年　ポーツマス条約。サハリン南半分が日本領（植民地）となる。
・1926（大正15）年　旧敷香（現ポロナイスク市）郊外　オタスを居住区に。
（生業を奪われ、後に「土人の杜」に）
・1931（昭和 6）年　土人教育所開校（皇民化教育はじまる）同化政策。
・1942（昭和17）年　日本軍が青年たちを軍隊に（召集令状）
・1945（昭和20）年　第二次世界大戦終結。日本は敗戦。
しかし青年たちは国境で戦う。多大な犠牲。
また、多くの青年（兵士）たちが捕えられ、シベリアに拘留され強制労働。北川源太郎氏、スパイほう助罪（9年6ヶ月）。カンスクやクラスノヤルスクで服役。
・1955（昭和30）年　北川源太郎氏日本へ、網走へ。
・1958（昭和33）年　北川五郎一族網走に（９人）
・1967（昭和42）年　北川源太郎氏　軍人恩給請求却下される。
（戸籍法に基づく国籍はない。政府は召集令状を出していない、など）
・1967（昭和42）年　北川アイ子さんら、網走に（８人）

★新たな自覚と運動へ

・「北川源太郎」から、「Ｄ．ゲンダーヌ」へ。
・「3つのねがい」の発表と実現へ
①文化を守る　資料館建設（大曲に）1978（昭和53）年。
②慰霊碑（キリシエ）　1982（昭和57）年（眺湖台に）。
③民族の交流　1981（昭和56）年北川兄妹、ポロナイスク市を訪問。
・1984（昭和59）年　Ｄ．ゲンダーヌ氏急逝、妹アイ子さん後を受け継ぐ。
資料館館長、ウィルタ刺しゅうの講師、民族交流など。
ウィルタ協会：今も運動を続けている。
フレップ会：ウィルタ刺しゅうを継承。講座を開催、作品も発表。
・2007（平成19）年　北川アイ子さん逝去。

４．いまも５つの願いを（ウィルタ協会）

謝罪、墓参と再会、慰霊碑、戦後補償（軍人恩給など）、民族の自立支援。
せめて「墓参と再会」を。――日本国、日本国民としての責任。

★いま、網走の私たちに

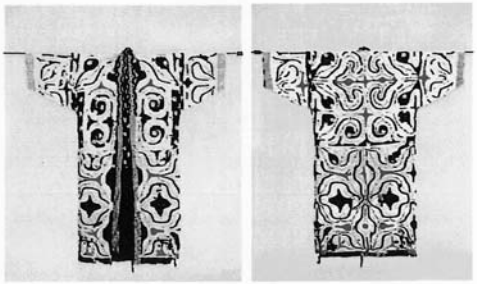
・網走の文化財として、保存と継承を。
・歴史に学び、生かす。民族と連帯（認めあうことの大切さ）―真の民主主義と平和を。

ウイルタの文様とアイヌの文様

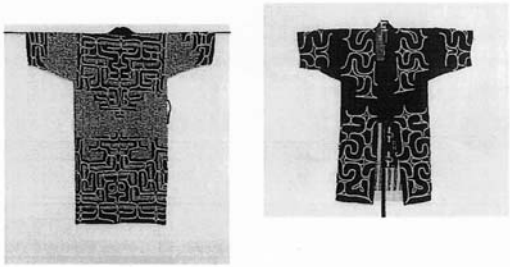
北海道、サハリン、北東アジアにかけて、渦巻きを主体にした文様が広くみられます。もっとも渦巻き文様自体は、 世界各地でみることができます。

文様のことを比べて考えるときには、文様の形だけではなく、どのように施されているか （技法） や色の取り合わせにも注意する必要があります。

ウイルタの衣服
文様がある部分は襟、 袖口、 裾で
右の北海道アイヌの衣服のように
全面にほどこされることはない。
文様自体は刺繍糸で構成されており
布を渦巻き文様に切って縫いつける
というようなことはしない。
何色かの糸が使われていることが多いです。



北海道アイヌの衣服
布を折りたたんで切って広げたものを
（このような場合は白布が使われます）
地になる衣服に縫いつけ、 更に
そのうえから刺繍を施してあります。
赤がポイント的に使われています。
（アップリケ＋刺繍）



この２点も北海道アイヌの資料です。 左のものは、 布を細くきって、折りたたみながら縫いつけてその上から刺繍をしています。 右のものは、 刺繍だけで文様ができているものです。 ウイルタのものとどう違うか比べてください。

ジャッカ・ドフニにはウイルタの刺繍がほどこされたものがたくさんあります。
ウイルタと同じ言葉のグループのナーナイという人たちの衣服もあります。 刺繍をほどこしてある部位は同じですが、 施し方や糸の色遣いに注目してみると、 違いがみえてくることでしょう。

北海道立北方民族博物館　笹倉いる美

それぞれの民族の紋様

◎ウィルタ

1. ハート・うずまきを基本に
2. 大陸の影響を色濃く
3. アムール河流域の人々共通　→　生地も多様
4. 色彩豊か

・ニブフ
・ナーナイ
・ヤークト など

ウィルタにもよく似ている。

・生地も多様
・一本の線を複数の色で
・近年様々な刺しゅう、
・テープなどの利用も

◎北海道アイヌ・樺太アイヌ

1. ”かっこ”(括弧)紋様などが基本
2. 日本・大陸との交流
3. 方　法

布に
(1)チヂリ・・・・・・線状の刺しゅうのみ
(2)切伏・・・・・・・テープ状のものを折って展開
(3)カパラミプ（服の名称）・・・・平面的に切って・・・。

はぎれをよく使う
ふちどり(ぬいつけ)

・全面に施す
・色彩はあまり多様ではない
・樺太アイヌのものの方が色彩は多様なようです

参照・引用文献一覧

池上二良編『ウィルタ語辞典』（北海道大学図書刊行会・1997）

ウィルタ協会（会報）「アルドゥ」

ウィルタ協会『北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニ展示作品集［改訂版］』（ウィルタ協会・2002）

扇貞雄『ツンドラの鬼（樺太秘密戦編）（第5版）』（扇兄弟社・1975）

大塚和義「観光地としての「オタスの杜」」Article Circle18号（1996），4–7頁

樺太庁編『樺太庁施政三十年史（下）』（原書房・1974）

北川アイ子『私の生いたち』（春の風文庫・1983）

北川アイ子（弦巻宏史編）『私の生いたち』（非売品・1993）

北川アイ子（口述）「「オタス」の暮らしとわたし」北海道立北方民族博物館『第一二回特別展　樺太一九〇五–四五―日本領時代の少数民族―』（1997），15–18頁

河野本道選『アイヌ史資料集　第六巻樺太編』（北海道出版企画センター・1980）

小林笑子「北方少数民族ウィルタの産育」女性と経験9号（1984），34–39頁

小林笑子「北方少数民族ウィルタの宗教観」女性と経験10号（1985），52–55頁

小林笑子「北方少数民族―ウィルタの葬制・婚姻」女性と経験11号（1986），103–106頁

小林笑子「北方少数民族ウィルタの暮らし―社会生活・生業―」女性と経験12号（1987），65–71頁

小林笑子「北方少数民族　ウィルタの衣生活」女性と経験13号（1988），68–71頁

タチヤーナ・ローン（永山ゆかり・木村美希共訳／津曲敏郎・加藤博文監訳）『サハリンのウイルター 18–20世紀半ばの伝統的経済と物質文化に関する歴史・民族学的研究』（北海道大学大学院文学研究科・2005）

田中了/D・ゲンダーヌ『ゲンダーヌ―ある北方少数民族のドラマ』（現代史出版会・1978）

田中了『サハリン北緯50度線―続・ゲンダーヌ』（草の根出版会・1993）

田中了編『戦争と北方少数民族』（草の根出版会・1994）

千葉茂樹・藤野知明「第6章　踏みにじられた北方民族の軌跡」原田勝弘等編『環太平洋　先住民族の挑戦』（明石書店・1999），203–240頁

弦巻宏史「自然の民　ウィルタ」（非売品）

北海道高等学校教職員組合少数民族専門委員会編『生徒とともに考える日本の少数民族―その現状と指導の手引き』（共同印刷・1982）

テッサ・モーリス＝スズキ『辺境から眺める』（みすず書房・2003）

波木里正吉『オロッコ物語』（近代文藝社・1981）

ニコライ・ヴィシネフスキー（小山内道子訳）『オタス』（北海道大学大学院文学研究科・2005）

北海道新聞「ウィルタの切り紙紋様1〜7」1984年1月9日〜15日掲載記事

三木理史『国境の植民地・樺太』（塙書房・2006）

山田祥子「北の隣人ウイルタのことばを学ぶ」Article Circle69号（2009），14–17頁